Benesse®

**表紙／裏表紙**
東京都 ● 品川区立第一日野すこやか園


お問い合わせ先
**0120-933-964** 通話料無料
受付時間 10:00〜17:00（日曜・祝日は除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。
※携帯番号・PHSからもご利用できます。
※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、**086-214-6337**へおかけください（ただし通話料がかかります）。



OTH014


これからの幼児教育を考える 2011春


2011年1月20日発行 発行人 新井健一 編集人 後藤素子
発行所 （株）ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所


©Benesse Corporation 2011


# これからの幼児教育を考える

2011 ● Spring 春

## 園の遊びがもたらす幼児期の「学びの芽生え」


インタビュー
**無藤 隆** 白梅学園大学 子ども学部教授
**秋田喜代美** 東京大学大学院 教育学研究科教授


コピーして使えます！ 「学びの芽生え」を考える園内研修用ワークシート

データから見る 幼児教育 卒園前後の保護者の意識

保護者へのサポートに関するアドバイスつき

ベネッセ次世代育成研究所5周年記念シンポジウム開催報告

Benesse® 次世代育成研究所

# これからの幼児教育を考える 春 2011 Spring

Contents


1 特集

園の遊びがもたらす幼児期の「学びの芽生え」

2 …… 理論編1 インタビュー
「学びの芽生え」が生涯の学びの出発点になる
白梅学園大学子ども学部教授 **無藤 隆**

5 …… 理論編2 インタビュー
保育者の「遊びの見通し」が「学びの芽生え」に結びつく
東京大学大学院教育学研究科教授 **秋田喜代美**

8 …… 実践編 実際に使えるワークシートつき
ワークシートを活用した園内研修で園全体で「学びの芽生え」を考える

16 …… 園内研修実践例 ワークシートで場面を共有して〝遊びを見通す力〟をつける
東京都品川区立第一日野すこやか園（幼保一体施設）

18 データから見る 幼児教育

卒園前後の保護者の意識

入学前の心配事は「通学の安全」「新生活へのスムーズな移行」・・・18
子どもが小学校生活に慣れてきたと感じるのは、5～6月が多い・・・19
安全対策として、母親の6割弱が子どもの帰宅時に在宅している・・・19
入学後に増えたのは、明日の準備と安全に関する不安や悩み・・・20
入学を機に子育てから手を離そうと思う母親が約6割・・・・・・・20

調査データを踏まえ、卒園前の保護者のサポートを考える・・・・・・・・21
東京学芸大学 総合教育科学系教授 **岩立京子**

22 ベネッセ次世代育成研究所5周年記念シンポジウム開催報告

乳幼児の健やかな発達にとって大切な環境とは何か


表紙の写真

**東京都品川区立第一日野すこやか園**
子どもたちが夢中になって作るのは、飲料の容器を使ったビー玉迷路に、牛乳パック製の自動車。周りの作品を参考にあれこれと工夫してみたり、お友だちや先生と相談してみたり。楽しく遊びながら一生懸命考える子どもたちの姿がありました。

## ベネッセ次世代育成研究所とは

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

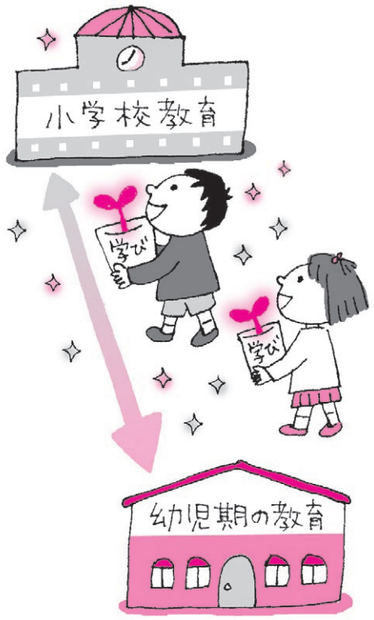
特集

# 園の遊びがもたらす幼児期の「学びの芽生え」

園での遊びは、小学校以降の学びにどのようにつながっているのでしょうか。この点を十分に理解することは、幼児期の教育と小学校教育の接続を進めていくうえで非常に大切です。今回は「理論編」「実践編」の2部構成で、幼児期の「学び」について改めて考え、具体的な援助のあり方を探っていきます。

幼児期の教育にかかわる幼稚園・保育所・認定こども園の先生がたへ

## 「学びの芽生え」から幼小接続[※1]を考える




### 幼小の「学び」の接続を意識した援助が求められている

「幼小接続」の取り組みが今、全国的に広がっています。いわゆる小1プロブレムが社会的な課題となる中で、幼児期の教育と小学校教育がこれまで以上に連携し、園ではぐくんだ力を土台に、小学校での生活を積み上げていくことが求められています。

幼小接続を効果的に進めるには、小学校入学前の「準備」にとどまることなく、園から小学校への学びのつながりを踏まえた援助を保育者が行うことが重要です。そこで、幼小接続に必要な要素の中でも、特に「学び」を中心に特集を構成しました。

### 幼小接続のキーワード「学びの芽生え」

「理論編」では子どもに経験してほしい学びや保育者の援助のあり方を解説し、「実践編」では園全体で具体的な援助を考えるための研修に活用できるワークシートを掲載しています。今回、キーワードになるのが、幼児期にはぐくんでおきたい「学びの芽生え」です。これは、文部科学省「幼小接続会議[※2]」から出された報告書（2010年11月）で提唱されている言葉です。本誌では同会議の座長・無藤隆先生、副座長・秋田喜代美先生に分かりやすく解説していただいています。

5歳児は、卒園まで残り数カ月になりました。園で、はぐくんでおきたい力や小学校入学に向けた援助を見つめ直すヒントにしていただければと思います。

### こんな園長先生におすすめ

◎保護者に幼児期の遊びの意義を伝えるのが難しいと感じている
◎幼小接続・連携を充実させたいと思っている
◎遊びの中から、どのような学びが得られるのかを知りたい
◎園全体として子どもの援助の方針を統一していきたい

※1 「幼小接続」とは、幼稚園と小学校の接続のみではなく、幼稚園・保育所・認定こども園が行う幼児期の教育と小学校教育の接続を表しています。
※2 正式名称は、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」。記事の中では、「幼小接続会議」と表記しています。

理論編 1

インタビュー

# 「学びの芽生え」が生涯の学びの出発点になる

幼児期の遊びの中での「学びの芽生え」が、今注目されています。
学びの芽生えとは具体的にどのような状態を表し、なぜ子どもにとって重要なのでしょうか。
文部科学省「幼小接続会議」の座長を務めた白梅学園大学の無藤隆先生に
解説していただきました。

白梅学園大学子ども学部教授
**無藤 隆**
むとう・たかし
白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。「幼小接続会議」座長のほか、文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に『現場と学問のふれあうところ』（新曜社）など。

## 幼児教育は小学校の「準備」ではなく「土台」

幼稚園、保育所、認定こども園における幼児教育・保育はどうあるべきか、そしてそれを小学校にどのようにつなげるべきかということが、文部科学省「幼小接続会議」の重要な論点でした。近年、幼小接続が注目されている直接的な背景には、いわゆる小１プロブレムがあるのですが、この問題を解決するには、単に幼稚園・保育所などが「準備教育」をすればよいわけではありません。幼児教育を、小学校以降の教育の「土台」ととらえ、一人ひとりの子どもに対して長期的な視野をもった援助をする必要があります。

全国で幼小接続の実践も活発になってきていますが、必ずしも期待通りの成果はあがっていないようです。その要因には３つが考えられますが、これらはいずれも幼児教育の本質が十分に理解されていないことに根ざしています。

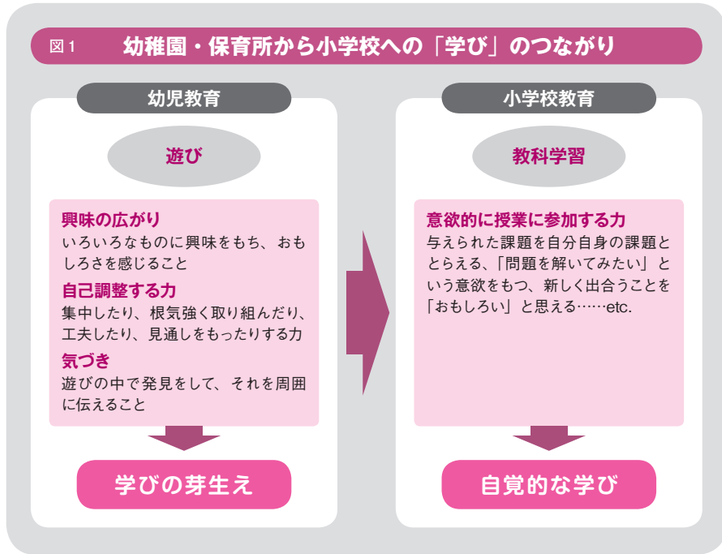
１つは、先ほど述べたように、幼児教育を小学校の「準備教育」と考え、読み書きや計算、長時間椅子に座る練習などに終始してしまうケースです。確かに、そのような指導が必要な面もありますが、それは幼児教育の本質ではありません。

２つめは、逆に「幼児期は遊んでいればいい」という発想です。遊びが大切なのは、その中に「学び」があるからです。保育者がその点を理解せず、単に子どもが遊んでいるだけでは、なかなか学びは生じません。

３つめは、幼児教育を基盤として、その上に小学校の学びを積み上げていくという意識を、小学校側が十分にもっていないケースです。子どもは遊びの中で、興味をもったり、気づいたり、考えたりする力を伸ばしていますが、それを小学校側が理解せず、ゼロからのスタートという意識をもっていることもあるようです。

幼小接続が目指すのは、幼児期の教育と小学校教育が相互理解を深めながら、お互いの良質な部分を取り入れ合うことです。それによって子どもは園における学びを土台として、小学校以降の学びをスムーズに発展させることができます。

図1 幼稚園・保育所から小学校への「学び」のつながり




## 「学びの芽生え」があって「自覚的な学び」が生まれる

幼小接続を考えるうえで重要なのが、子どもの学びがどのように発展していくかを理解することです。幼小の双方の関係者が「幼児期の『学びの芽生え』から、小学校低学年の『自覚的な学び』へ」というつながりを十分に踏まえた援助や指導を心がける必要があります。

具体的に説明しましょう。「学びの芽生え」とは、遊びの中で、楽しみ、試し、工夫し、見通しをもつというふうに、子ども自身が遊びを発展させていくことです（具体例は４ページ図２を参照）。幼稚園教育要領で言えば、「体験の関連性」（第３章を参照）を指します。例えば、葉っぱをすりつぶしている子どもは、初めは保育者のまねをしますが、楽しくなると、木の実で試したり、異なる色水を混ぜる工夫をしたりしながら、次第に「こんな色を作りたい」「何かを染めてみたい」といった目的や計画をもって遊ぶようになります。これが、学びの芽生えです。

学びの芽生えは、小学校低学年で育つ「自覚的な学び」の土台になります。自覚的な学びとは、先生が与える課題に興味をもち、自分の課題として受けとめ、「解いてみたい」という意欲をもって学ぶことです。単におとなしく椅子に座っているのではなく、意欲的に授業に参加する力と言うこともできるでしょう。

### ここから始めてみませんか？「学びの芽生え」を促す援助

**◎遊びを発展させましょう**
同じ遊びを繰り返すのではなく、今日、明日、来週……と、少しずつ複雑な遊びへと発展させることが大切です。毎日の保育記録を振り返り、翌日以降の計画を練るとよいでしょう。

**◎協同的な活動を入れましょう**
５歳になったころから、特にグループで行う協同的な活動を重視してください。１日では終わらない連続的な活動の方が協同的な活動を通した学びは深まりやすくなります。

**◎言葉による伝え合いを取り入れましょう**
帰りの時間に何をして遊んだかを発表し合うなど、形式はさまざまで構いませんから、言葉による伝え合いの活動を取り入れましょう。

## 「学びの芽生え」は遊びの中でこそ経験できる

学びの芽生えがどのように自覚的な学びへとつながるかは、学びの芽生えをもたらす３つのポイントを説明することで理解していただけるでしょう。それは、「興味の広がり」「自己調整する力」「気づき」です。

「興味の広がり」は、遊びの中でいろいろなものに興味をもち、おもしろさを感じることです。これが十分に育った子どもは、小学校に入っ

**図2　援助例（色水遊びの場合）**

（5歳児／7〜9月頃）

最初は、保育者のまねをして、葉っぱをすりつぶして色水を作る

**学びの芽生え**

**興味**・保育者が葉っぱや草の実をすりつぶしているのに興味をもつ

**気づき**・葉っぱをすりつぶすと、色が出ることに気づく

**援助**　他の葉っぱや花、草の実を用意しておき、子どもが気づくような環境をつくる

さまざまな素材を使って、異なる色の色水作りを楽しむようになる

**学びの芽生え**

**興味**・葉っぱだけでなく、花の実にも興味が広がる

**気づき**・他の材料を使うと、別の色ができることに気づく

**援助**　色水を混ぜると、異なる色になることに気づくようにし、この気づきに共感する。ペットボトルなどを多く準備する

色水を混ぜて、いろいろな色を作って遊び始める

**学びの芽生え**

**自己調整**・自分の好きな色を作るために、各色水の量を加減して混ぜるなどの工夫をする

**気づき**・色水を混ぜると、別の色になることや同じ色でも濃淡があることに気づく
・自分の色水を友だちに見せて、気づきを伝え合う

**援助**　子どものつぶやきを周囲の子どもにつなぐ、また、別の遊びに発展させていく（和紙染めやジュース屋さんごっこなど）

色水遊びから発展して和紙染めを楽しむ

**学びの芽生え**

**興味**・色水作りから和紙染めに興味が広がる

**自己調整**・好きな色に染めるために工夫し、うまく染まらなくても根気強く取り組む

**気づき**・予想と実際の違いに気づき、不思議さを感じる
・和紙に色水が染みる不思議さを感じる。

てから、算数の問題を解くのも、生活科で町を探検するのも、おもしろいと感じるようになります。

「自己調整する力」とは、集中したり、根気強く取り組んだり、工夫したり、ときには我慢して先を見通しながら自分をコントロールし、今の遊びをつくっていく力です。この力は、長期間の活動をコツコツと続ける中で育ちます。特に、5歳〜7歳の時期に育てることが重要で、十分に育たないと、小1プロブレムが起こりやすくなると考えられます。

「気づき」は、思考力の芽生えと密接に関連します。例えば実をすりつぶしたら、「こんな色になった！」という発見が気づきです。気づきがあると、それを言葉にして友だちや先生に伝えたくなります。気づきやコミュニケーションを繰り返す中で、思考は深まるのです。

ここで強調したいのが、学びの芽生えは遊びの中でしか経験できないということです。ですから、小学校への準備教育だけでも、逆に単に遊ばせるだけでも、幼児期の教育としては不十分です。保育者に最も求められるのは、学びの芽生えを促すことを強く意識しながら遊びの援助をすることなのです。

小学校での学びは、中学校や高校、大学、そしてその後の人生へとつながっていきます。その出発点になるのが幼児教育であることを認識し、学びの芽生えを育てる援助を実践していただければと思います。

**現場のみなさんへ**

◎幼児教育の潜在的な価値は、まだまだ世の中に十分には伝わっていないと感じます。学びの芽生えが注目されている今は、幼児教育の本当の意味を伝えるチャンスといえます。これまでに幼児教育が取り組んできたよい部分を、さらによくするという気持ちで、自信をもって子どもに接してください。

理論編 2

インタビュー

# 保育者の「遊びの見通し」が「学びの芽生え」に結びつく

**学びの芽生えを促す援助に決まったかたちはありません。必要なのは一人ひとりの子どもの状態に合わせた柔軟なサポートです。援助を行ううえで、園全体で共有したい考え方や具体的な実践方法について、「幼小接続会議」の副座長を務めた東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。**

東京大学大学院教育学研究科教授
**秋田喜代美**
あきた・きよみ
東京大学大学院教育学研究科教授。「幼小接続会議」副座長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、『保育の心もち』『保育のおもむき』（いずれもひかりのくに）など。

## 学びに向かうきっかけは大人も子どもも同じ

幼児期の子どもは、どのようなきっかけによって「学び」に向かうのでしょうか。私は、子どもも大人も大きな違いはないと考えています。例えば、大人が、毎日同じ料理をルーティンワークとして作るだけなら、何も考える必要はありません。しかし、ふだんとは食材を変えてみたり、お客さんをもてなしてみたりといったきっかけで、工夫しようという気持ちが生まれます。子どもも同じで、遊びの中から生まれたきっかけを育てていくことによって、初めて学びが生まれるのです。

しかし、大人にも、常に学び続けようとする姿勢をもつ人ともたない人がいます。これは、幼児期に十分な「学びの芽生え」を経験し、それが小学校以降の学びへとつながったかどうかが大きく関係するものと思われます。

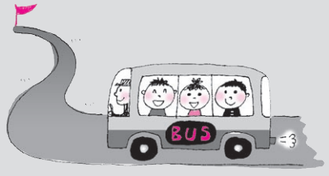
### 生涯学習の基盤として世界的に注目される幼児教育

◎1990年ごろから、「保育の質の効果」、そして幼稚園から高校までの「教育課程の一貫性」について、アメリカやイギリスなどを中心に議論が盛んになりました。背景には、幼児期の学びがその後の人生に多大な影響を及ぼすという考えが広く知られるようになったことなどがあります。幼いころから「わからないことを調べたい」という気持ちが育っていれば、例えば、大人になったときに自分から健康に関する情報を調べて健康管理に生かすなど、さまざまな場面で新しいものを取り入れて自分の生活をより豊かに、より幸せにすることができます。そのように、生活者として学び続ける生涯学習の基盤として幼児教育が重視されているのです。

**図1 幼児教育と小学校教育の違い**

| 幼児教育 | 小学校教育 |
|---|---|
| 一人ひとりのペースに合わせて散歩するイメージ。目的地に到着することより、途中でさまざまなものに関心を抱くことを重視。 | 全員が同じバスに乗って、決められた目的地に時間通りに到着するイメージ。 |

◎個々の子どもの個性を重視し、自由な遊びの中で「学びの芽生え」を促すことを目指す。




◎最低限必要な知識・技術などを身につけるために、すべての子どもが共通の目標に向かって学ぶ。

幼児期の学びの芽生えは、幼児教育と小学校教育の違いをイメージするととらえやすくなるでしょう。小学校教育は、すべての子どもが電車やバスに乗って決められた目的地に時間通りに到着するようなイメージです。窓から景色を眺めるなど、多少の行動の自由はありますが、基本的には集団で同じ方向に進んでいきます。

一方、幼児教育は、一人ひとりのペースに合わせた散歩です。「自分のペースで歩いた」という自信を付けたり、目的地への到着よりもその過程でさまざまなものに興味をもつことを大切にします。

ただし、散歩にも地図は必要です。どのような方向に育ってほしいかという地図を保育者がもち、子どものペースに合わせて導いていく必要があります。その意味では、保育者には、子どもの育ちを俯瞰（ふかん）的に見る「タカの目」、そして子どもに寄り添う「アリの目」の両方が必要と言えるでしょう。

子どもが幼小の違いをスムーズに乗り越えていくには、保育者が小学校教育へのつながりを意識する必要もあります。そのためには、小学校学習指導要領を読んだり、小学校低学年の授業を見たりすることも大切になります。

## 学びを促す援助の基本は「関心」のありかを知ること

では、学びの芽生えを促すために、保育者はどのような援助をすればよいのでしょうか。これは、どのようなときに学びが起きるのかを理解することが基本になります。

そもそもこの時期の子どもは、小学校以降のように「○○をしなさい」といった保育者の言語的指導で学ぶのでしょうか。確かに、そういう場面もありますが、それでは学びの芽生えを促すことはできません。保育者の援助を通じて「もの・ひと・こと」に深くかかわる中で、子どもは「自ら」学ぶのです。

例えば、昆虫を見つけたとき、保育者が「図鑑で調べよう」と促すのは、よく見られる援助です。子どもが昆虫の名前を知りたがっているのなら、それでよいと思います。しかし、「石の下にたくさん虫がいる」「同じ種類なのに大きさが違う」といった点に関心があるのなら、それらを探求していくための援助によって、子どもは昆虫とより深くかかわり、学びの芽生えが促されます。つまり、子どもの関心のありかを捉えることが、学びの芽生えをうながす出発点になるのです。

ただ、学びのきっかけは保育者が意図した通りに起こるとは限りません。静電気で体にビニールがくっつくことに気づいた子どもがいるとしましょう。こうした瞬間は、学びの芽生えを促すチャンスです。保育者がそれを見逃さずに一緒になって興味をもち、他の子どもに働きかけたり、別の素材で試すように促すことで、偶然のきっかけが学びにつながっていくのです。

## 安心できる環境の中で「広げる」「深める」

次に園における環境づくりの2つのポイントを説明しましょう。

1つめは、ふだんから大切にされているとは思いますが、学びの芽生えを促すうえで、一人ひとりの子どもが、保育者や仲間から「自分は認められている」という安心感を抱ける環境は不可欠です。子どもは、不安があるうちは、決して学びに向かわないからです。

そして2つめは、活動を「広げる」「深める」という視点を園全体で共有することです。「広げる」は、ひとりの遊びを仲間との遊びにつなげたり、異なる環境や素材で試したりすること。そして「深める」は、保育者がつねに活動の見通しをもって、子どもとともに考えて次の一歩に展開させていくことです。

例えば、積み木遊びでより高く積みたいという子どもの関心を支えるのは、「深める」援助です。こうした援助により、子どもは「土台が大きくないと不安定になる」などと学び、活動は深まっていきます。一方、積み木で作った建物を駅に見立て、ほかの子どもとともに電車ごっこをするように導くのは「広げる」援助と言えます。2つの援助ははっきりと分けられるわけではありませんが、保育者が違いを意識して場面に応じて援助を使い分けることで活動を展開させやすくなります。

そのために必要なのが、保育者が「遊びの見通し」をもつことです。これは、例えば、牛乳パックでイカダを作る活動で、「どれくらいの大きさを作れるか」「イカダを使って、どんな遊びができるか」といった次の展開の見通しをもっておくことです。保育者が子どもの発達段階や遊び・生活経験などを踏まえて遊びの展開を見通し、複数の援助を想定しておくことで、活動の「広がり」や「深まり」がうながされます。

### 「学びの芽生え」を促す援助のポイント

**1.「周囲から認められている」という実感をもたせる**
子どもは心に不安を抱えていると、学びに向かいません。一人ひとりの子どもが保育者や仲間から「認められている」と実感できる環境を整えましょう。

**2. 遊びを「広げる」「深める」という視点をもつ**
子どもが遊びこめるように、ほかの子どもなどに「広げる」、1つの活動を「深める」という2つの視点をもち、場面に応じて援助に取り入れましょう。

**3. 保育者が「遊びの見通し」をもつ**
発達段階や遊び・生活経験などを踏まえ、「どのように展開させるとよいか」という遊びの見通しをもっておくことで、先を見据えた援助になり、子どもの学びをうながしやすくなります。

## 保育の場面を共有した研修で遊びを見通す力を養う

しかし、経験の浅い保育者にとって長期的な遊びの見通しをもつのは難しく、目の前の子どもを追うだけの援助になってしまいがちです。すると、気になったことを、あれもこれもと指示するような援助になり、子どもが創意工夫をするチャンスが失われてしまいます。

一方、ベテランの保育者は「今は無理でも、半年後には自然に友だちと一緒に協力するようになるだろう」といった長期的な見通しをもつため、「今、指導しなくてよいこと」が見極められます。これは、学びの芽生えを促すうえで、とても大切なことです。

ですから、どの保育者も遊びの見通しをもてるような園内の環境づくりが求められます。若手の保育者がベテランの実践を見学したり、前年度の記録を確認したりすることは、活動の内容や子どもの育ちへの理解につながるでしょう。記録や写真、ビデオなどをもとに活動の場面を共有し、保育者同士が、子どもの学びや援助について話し合う研修も、遊びの見通しを養ううえでは有意義だと思います。

学びの芽生えを促す援助は、いわゆる早期教育とは本質的に異なります。保育者のみなさんは、子どもの中にゆっくりと育つきめ細かな芽を見つけ、育てていくという視点を大切にしてください。

### 現場のみなさんへ

◎園のみなさんが多忙であることはよく理解していますが、忙しさのあまり心の余裕まで失うと、子どもに対する要求が多くなってしまいがちです。「学びの芽」は、じっくりと子どもを見つめたときに見えてくるものです。心にゆとりをもって朝から笑顔で子どもを受け止められるように、あまり無理はせず、どうか健康にも気をつけてください。個々の保育者らしさ、園らしさを大切にしながら、「学びの芽」をはぐくんでいただきたいと思います。

実践編

実際に使えるワークシートつき

# ワークシートを活用した園内研修で園全体で「学びの芽生え」を考える

**園全体で学びの芽生えを考えるため、園内研修を活用してみましょう。ワークシートを使って幼児期の「学び」への理解を深め、具体的な援助の方法を考えていく研修の進め方をご紹介します。**

## 付録のワークシートで子どもの気づきや気持ちの動きを共有

園全体で「学びの芽生え」を促す援助を行っていくうえでは、園内研修が大きな役割を果たします。ベネッセ次世代育成研究所の磯部頼子顧問は次のように説明します。

「学びの芽生えを促すには、保育者が子どもの気づきや気持ちを十分にとらえる必要があります。子どもの見方は保育者によって異なりますから、園内研修で意見を出し合ううちに幼児理解が深まり、援助の幅も広がっていくでしょう。話し合いを通じて子どもへの接し方の方針がまとまっていくよさもあります」

子どもの姿について意見を交わし合う研修では、保育の一場面を取り上げて共有する方法が効果的です。共有の仕方は、ビデオや写真、文章の記録など用意しやすいもので構いません。本誌では今回は、子どもの気づきや気持ちの変化を理解しやすいように4コマのイラストで流れを表したワークシートを用います。ワークシートには保育者が自分の考えを記入するスペースが設けられており、書くことで考えが整理され、意見交換が活性化しやすいといったメリットもあります。

研修をその場だけで終わらせず、実践に結び付けるにはどのようなことに気を付けるべきでしょうか。東京家政大学の佐藤暁子先生は、研修をきっかけに、保育者が日常会話の中で子どもの姿を話し合う関係をつくってほしいと話します。

「研修を通して『ほかの保育者と話し合うことは自分の成長につながる』と実感すれば、日ごろからほかの保育者に子どものことを話したい、相談したいという気持ちが生まれるでしょう。そのような風通しのよい環境をつくるためにも、研修では全員が自由に発言しやすい雰囲気づくりを心がけてください」

◎監修

東京家政大学　准教授
**佐藤暁子**

ベネッセ次世代育成研究所
顧問
**磯部頼子**

### ワークシートを使った研修のよさ

◎記入する時間を設けることで個々の保育者が自分の考えを整理できる
◎記入してから話し合うため、意見交換が活性化しやすい（若手の保育者も発言しやすい）
◎ひとつの事例を共有するので、子どもの姿について多様な見方を知ることができる

## ワークシートを活用した園内研修の進め方

「学びの芽生え」を促す援助を園内で考える研修として、ワークシートを用いた方法をご紹介します。P.10以降に3枚のワークシートを掲載しています。いずれも、実際の保育で見られ、学びの芽生えを考えるうえで大切な場面を取り上げていますから、ワークシートをコピーしてそのまま研修に使っていただけます。また、それぞれの園が抱える課題やテーマに沿って、同様のワークシートを作成しても有意義な研修になるでしょう。

### 研修の進め方

**1 研修についての説明**（5分）

ファシリテーターが研修の流れとねらいを説明します。ワークシートの概要とともに、STEP❶～❸に沿って自分の考えをまとめることを伝えます。

※ワークシートのみコピーして配付し、解説はファシリテーターが持っておいてください。

**2 ワークシート記入**（10～15分）

個々の保育者がワークシートに記入します。「正解はない」「思ったことは何でも書いてよい」などと伝えると、自由な考えを書きやすくなるでしょう。

**3 ワークシートをもとにした話し合い**（20～30分）

記入内容をもとに話し合います。順番に発表するよりも、ひとつの考えを広げたり、反対の考えと比較したりすると、話し合いが深まりやすくなります。

**4 まとめ**（10分）

研修を通して学んだことや感じたことを、発表し合います。

### ワークシートの構成

ワークシートでは、遊びの中で「学びの芽生え」を促す援助を、3つのSTEPでとらえています。

**STEP❶ 子どもの気づき・育ち**
その場面での子どもの気づきや気持ち、育っている力などをとらえる

**STEP❷ 学びの芽生えを促すための見通し**
❶を踏まえ、保育者が遊びの展開を見通して、次に子どもに気づいたり考えたり、学んだりしてほしいことを考える

**STEP❸ 具体的な援助**
❷を実現するための具体的な援助の方法を考える

研修では、まず個々の保育者が4コマのイラストをもとにSTEP❶～❸をワークシートに記入。その内容をもとに話し合い、子どもの見方や援助に関する考えを深め、共有することをねらいとします。

### ファシリテーションのポイント

**◉すべての意見を尊重し、受け入れる**
すべての意見を尊重することで発言しやすい雰囲気になります。例えば、若い保育者が遠慮していたら、「○○さんはどうかな」と発言の機会をつくり、「そういう考え方もあるね」などと受け入れる姿勢を示しましょう。

**◉自分の意見を述べ過ぎない**
通常、ファシリテーターは、園長や主任など、指導的立場にある先生が担当します。ファシリテーターが「この場面は、こう考えるべき」などと意見を述べ過ぎると、参加者がその考え方に影響されてしまうことがあります。ファシリテーターは、話し合いの調整役に徹しましょう。

**◉似ている場面の経験や異なる意見を聞いてみる**
話し合いが停滞したら、「似ている場面を経験したことはあるか」「異なる考え方をした人はいるか」「自分が子どもの立場だったらどう感じるか」といった投げかけによって、参加者の視点を変えてみるとよいでしょう。

**◉結論を出す必要はない**
結論や正解を出す必要はありません。「今日の話し合いをもとに、自分の保育を見つめ直し、明日からの実践に生かしてください」といった言葉で締めくくるとよいでしょう。

コピーしてお使いください

「学びの芽生え」を促す援助　園内研修用ワークシート 1

# ヤゴのえさはオタマジャクシ!?

名 前：

年齢と時期　5歳児・5月　　場　面　保育室

あらすじ　イツキとリョウが園の池でヤゴを捕まえ、飼うために図鑑でヤゴのえさを調べました。ヤゴがオタマジャクシを食べることを知ったリョウはある行動に…。

**Q** 左のシーンを見て、STEP❶～❸について、あなたの考えを書きましょう。

**STEP 1**
子どもの気づき・育ち

**STEP 2**
学びの芽生えを促すための見通し（保育者の願い）

**STEP 3**
具体的な援助





ファシリテーター向け

園内研修ワークシート 1 「ヤゴのえさはオタマジャクシ!?」

# 研修の進め方・解説

## 考えの相違をきっかけに命の大切さへの理解を深める

ヤゴを捕まえた子どもは「ヤゴを育てたい」、オタマジャクシを育てている子どもは「オタマジャクシを守りたい」といった自分なりの目当てをもち、それを実現するために何をすればよいか、またどのように相手を説得すればよいかを必死に考えています。答えを出すのが難しい場面ですが、自分とは異なる考えをもつ人がいることにまずは驚き、次第に相手の考えに耳を傾け、お互いの意見を聞き合う体験ができるよい機会となるでしょう（磯部）。

## 解説のポイント

### STEP 1 子どもの気づき・育ち

最初に子どもの気づき・育ちを共有して、話し合いの足がかりとしましょう。例えば、「どの生き物にもエサが必要と分かっている」「分からないことは図鑑で調べればよいという知恵がある」などと読み取り、共有することで、次にどのような気づき・育ちをうながしたいかが見えてきます。

このシーンでは、子どもたちの根っこにある気持ちに気づくことも大切です。“ヤゴ派”と“オタマジャクシ派”の子どもがそれぞれの主張を譲らないのは、どちらにも「自分が捕まえた生き物は大切にしたい」という強い気持ちがあるからではないでしょうか。この視点を共有すれば、すべての子どもの考えを尊重した援助の仕方へと、話し合いが展開するでしょう。

### STEP 2 学びの芽生えを促すための見通し（保育者の願い）

意見が衝突してケンカにも発展しかねないシーンですから、研修では、子どもの話し合いをどのような方向に導いていくかが、重要なテーマになるでしょう。参加者から、「自分とは異なる考えをもつ人がいることに気づくようにしたい」「みんなが納得のいくまで考えをぶつけ合う体験をしてほしい」といった発言を引き出し、みんなで考えを深めていくとよいと思います。

子どもに命の大切さを考えてもらうえでも、よい場面です。「飼うことが難しい生き物がいることに気づくようにしたい」「生き物を飼うことに伴う責任を意識してほしい」といった参加者の言葉をきっかけに、具体的な援助について話し合うとよいでしょう。

### STEP 3 具体的な援助

このシーンで学びの芽生えを促す援助としては、「結論を急がず、子どもたちを見守りながら十分に話し合うように促す」「どのような結論を出すにしても、すべての子どもが納得できるようにする」などが考えられます。こうした発言が参加者から出たら、そのために必要な声のかけ方などを話し合い、より具体的な援助を探っていきましょう。

子どもの出した結論が、保育者が望むものとは異なったときの援助も想定しておきましょう。「子どもがヤゴを飼いたいという結論を出したら、毎日、エサとして何を、どれくらいあげればよいかなどを考え、現実的に可能かどうかを判断するように導く」といった援助が考えられます。

### ほかに保育者が経験しそうな場面

◎カエルやトンボなど、エサをあげるのが難しい生き物を飼いたがっている。
◎自分が栽培した野菜の収穫時に「かわいそう」といやがっている子どもがいる。
◎園で飼っているペットが死んでしまったとき、みんなで命の大切さを改めて考える。

コピーしてお使いください

「学びの芽生え」を促す援助　園内研修用ワークシート2

# グループ内で意見が対立!

名 前：

**年齢と時期** 5歳児・12月　**場　面** 保育室（遊園地ごっこの準備①）

**あらすじ** グループごとに乗り物を作って遊ぶ「遊園地ごっこ」の準備。あるグループでは、男の子はジェットコースター、女の子はメリーゴーラウンドをつくりたいと主張し、なかなか決まりませんでした。

**Q** 左のシーンを見て、STEP❶～❸について、あなたの考えを書きましょう。

**STEP❶ 子どもの気づき・育ち**

**STEP❷ 学びの芽生えを促すための見通し**（保育者の願い）

**STEP❸ 具体的な援助**





ファシリテーター向け

園内研修ワークシート2 「グループ内で意見が対立!」

# 研修の進め方・解説

## みんなが納得して次の活動に進める援助を

お互いが自分の考えを主張して譲らない状況は、協同的な活動の中ではしばしば見られます。活動への意欲を高めるためにも、全員が納得したうえで次の段階に進めるようなサポートが必要になるでしょう。この場面での有効な援助としては、主張する際にはきちんと理由を述べる、他のグループに目が向くようにして視野を広げる、などが考えられます。どのような結論が出るにしても、それぞれの子どもが「自分が考えて決めた」という実感をもつようにしたいところです(佐藤)。

## 解説のポイント

### STEP❶ 子どもの気づき・育ち

このシーンでの気づき・育ちには、「『年長さんに作ってもらったのに乗った』という発言から、過去の経験が生きていることがわかる」「年長として、年下の子どものために何かをしたいという気持ちが育っている」などが考えられます。さらに、小学校での学びにつながる育ちとして、「『遊園地の乗り物は何を作るか話し合ってね』という保育者の投げかけた課題を自分自身の課題としてとらえる力が育っている」ということに保育者が気づくことが大切です。

3コマめでほかのグループの意見を聞く姿からは、「周囲の情報を集め、自分たちの活動を決めようとする力が育っている」といった、協同的な活動で大切にしたい育ちも読み取れます。

### STEP❷ 学びの芽生えを促すための見通し（保育者の願い）

「対立」から学びの芽生えをうながすためには、どのような展開が望ましいのでしょうか。協同的な活動のよさを生かすためにも、「単に希望を主張するだけでなく、相手に理由を伝えられるようにしたい」「クラス全体の目的を達成するために、自分たちのグループはどう動くべきかを考えてほしい」といった発言が出るとよいと思います。

活動が工作に移ったあとも、協力して一生懸命に取り組むための配慮も求められます。参加者の「みんなが納得するかたちで決めることで活動への意欲を高めたい」といった発言を、みんなで共有しておきたいところです。子どもたちには、全体の中の自分を意識してほしいところです。

### STEP❸ 具体的な援助

みんなが納得するかたちで決めるための援助としては、「『ひとりずつ理由を話して考えてみよう』と、相手の言い分に耳を傾けるように促す」「じゃんけんやクジで決めるのではなく、時間が許す限り、子ども同士で話し合うようにして結論を出す」などが出てくると思います。ほかにも、「対立」を「協同」へと変える援助についてアイディアを出し合うことで、参加者一人ひとりの援助の幅が広がっていくでしょう。

子どもがグループから学級全体へと視点を広げるうえでは、「『他のグループとも話し合ってごらん』などと、学級全体の目的に気づくように導く」といった援助が有効であることも共有するとよいでしょう。

### ほかに保育者が経験しそうな場面

◎演劇の配役を決める際、自分の希望を譲らない。
◎みんなが最初に走りたいと主張して、リレーの順番がなかなか決まらない。
◎生活グループの名前を決めたいが、それぞれが好きな名前を主張して、なかなか決まらない。

コピーしてお使いください

「学びの芽生え」をうながす援助　園内研修用ワークシート 3

# 失敗は成功のもと!?

名 前：

**年齢と時期** 5歳児・12月　**場 面** 保育室（遊園地ごっこの準備②）

**あらすじ** メリーゴーラウンドのグループは、問題が次々に浮かび上がって、なかなか満足のいくものが出来上がりません。子どもたちはアイディアを出し合って何とか解決しようと試みます。

**Q** 左のシーンを見て、STEP❶～❸について、あなたの考えを書きましょう。

**STEP ❶ 子どもの気づき・育ち**

**STEP ❷ 学びの芽生えを促すための見通し**（保育者の願い）

**STEP ❸ 具体的な援助**





ファシリテーター向け

園内研修ワークシート 3 「失敗は成功のもと!?」

# 研修の進め方・解説

## 長期にわたる活動のよさを生かして協同性を育てたい

よりよいものを目指して試行錯誤するという貴重な経験ができるのは、長期にわたって続ける活動のよさです。みんなでアイディアを出し合って問題を解決していく経験は、子どもの協同性を育てるうえで大きなプラスになるでしょう。こうした場面では、力を合わせれば問題を解決できるという前向きな気持ちを支えながら、一人ひとりの子どものアイディアを引き出し、グループ内につないでいくような援助が大切になります（磯部）。

## 解説のポイント

### STEP ❶ 子どもの気づき・育ち

1・2コマめで読み取れる育ちとして大切なのが、「問題点があっても、原因を探し、試し、修正しようとする気持ちが育っている」ということです。最初に、この育ちを共有することで、保育者がどこまでの援助が必要かを判断しやすくなるでしょう。さらに、参加者から、「グループの中でお互いの意見を取り入れながら問題を解決しようとする力が育っている」といった発言を引き出し、子どもに協同性が育っていることも確認しておきましょう。

また飾りつけの問題を解決する姿からは、「過去の工作の経験を応用しようとする力が育っている」ということも読み取れます。

### STEP ❷ 学びの芽生えを促すための見通し（保育者の願い）

このシーンで望ましい遊びの見通しとしては、「みんなでアイディアを出し合えば、よりよいものが作れることに気づくようにしたい」「みんなで苦労して作品を完成させたときの達成感を味わってほしい」などが考えられます。どちらも、協同的な活動では大切な視点として、園全体で共有しておきたいところです。

協同的な活動には仲間とのコミュニケーションを通して、子どもが自分自身を認めていくという効果もあります。参加者から「自分の意見がグループに役立ったという実感から、自分を尊重する気持ちが育ってほしい」といった発言が出たら、そのことについてほかの場面もあわせてみんなで考えるきっかけになるでしょう。

### STEP ❸ 具体的な援助

子ども同士の学び合いをより深める援助としては、「『よい考えだね』『○○さんがこんなことを言っているよ』などと、子どものアイディアを認め、他の子どもにつないでいく」といったものが考えられます。このように子どものアイディアを大切にして周囲と結びつけていく援助によって、遊びはより高度になり、一人ひとりの自尊心も育っていくでしょう。

子どもが飾りつけで困っているシーンでも、「ずっと前に似たようなものを作ったことがなかったかな」と、過去の経験を生かして問題を解決できるようにするなどと、あくまでもヒントを提示するにとどめ、子ども自身が気づいたり、考えたりする援助が望ましいでしょう。

### ほかに想定される保育の場面

◎ドッジボールでなかなか勝てないグループが作戦を練っている。
◎グループでアイディアを出し合い、劇のストーリーを考えている。
◎役割を分担して卒園制作の作品づくりに取り組んでいる。

ベネッセ次世代育成研究所では、園での事例を集めた冊子『**幼児の遊びにみられる学びの芽**』を刊行しています。冊子の詳細はホームページからもダウンロードできます。
http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/

園内研修実践例

# ワークシートで場面を共有して〝遊びを見通す力〟をつける

## 東京都 品川区立第一日野すこやか園（幼保一体施設）

第一日野すこやか園は、第一日野幼稚園と西五反田第二保育園が併設された幼保一体施設。
今回は、幼稚園と保育所の保育者が共に「遊びの見通し」を考える、ワークシートを使った研修を行いました。
使用したワークシートは、P.10で紹介した「ヤゴのえさはオタマジャクシ!?」です。
「学びの芽生え」を促すヒントにしてください。

**準備したもの**
- ワークシート（p.10に掲載）
- 付箋紙（10人程度で研修する場合、付箋紙に考えを記入すれば、意見を分類してまとめるのが容易になります）

## 研修の流れ

### 話し合いが活性化しやすい環境づくり

**1. 机の配置を工夫**

全員の顔を見ながら話し合えるように、机を三角形にレイアウトしました。

**2. 異なる意見が出やすいメンバー構成**

多様な意見が出るように、幼稚園から３名、保育所から２名が参加し、ベテランや若手など経験年数の異なるメンバー構成としました。ファシリテーターは、保育園の副園長が担当しました。

### ①ねらいを説明する（５分間）

ファシリテーターがワークシートの概要やねらいを説明します。

**▶ファシリテーターの役割**

・みんなで同じ場面を見ながら、「学びの芽生え」を探っていくために、ワークシートを使用することを説明する
・子どもの発見や気づきがどのように展開してほしいかを見通し、そのための援助の方法を考えるという研修のねらいを説明する

### ②個々の考えをワークシートに記入する（10～15分間）

それぞれの保育者がワークシートに記入します。

**▶ファシリテーターの役割**

・思ったことや感じたことは何でも書いてよいことを伝える
・「こんなふうに考える子どももいるかも」など、いろいろな子どもの立場から考えることをすすめる

### ③話し合いで考えを深める（20～30分間）

ワークシートの場面の流れに沿い、保育者が記入内容を発表し合います。話し合いは「子どもの意見が食い違ったときにどう援助するか」「そもそも生き物の飼育を通して何に気づき、考えてほしいか」といった普遍的なテーマに発展していきました。

**▶ファシリテーターの投げかけ**

**他の保育者の意見との比較**「○○さんから、こんな考えが出ました。似ている考え、または異なる考えはありますか」
**自分の保育への置き換え**「実際に似た場面を経験したことがありますか」
**「学びの芽生え」への考察**「生き物の飼育によって子どもが得られる学びには、どのようなことがありますか」
**飼育上の難点**「生き物の飼育で困ることは何でしょうか」
**援助の広げ方**「一人ひとりの子どもの気持ちを受け止めるには、どのような援助が必要でしょうか」

### ④まとめ・振り返り

最後に「自分ならどのような援助をするか」を発表し合い、締めくくられました。

**▶ファシリテーターの言葉**

・保育に正解がひとつだけということはないので、それぞれの考えを大切にしてほしい
・保育者同士、お互いの考え方の共通点や相違点を確認していくことで、保育の質が高まる
・生き物を飼うことについては、園全体として方針を決める必要があるので、後日、改めて飼育環境などについて話し合いたい（小出せい子先生／保育園副園長）

**研修を終えて**

◎他の先生の意見を聞いて「そんな考え方もあるんだ」と視野が広がったのが最大の学びでした。このような形式の研修を続けることで、子どもへの全般的な理解が深まると思いましたし、個々の保育場面における具体的な援助の幅が広がりそうです。（島倉千絵先生／５歳児担任）

◎これまで、保育者がひとつの場面についてひざを突き合わせて話す機会はあまりありませんでした。他の先生がたの考えを知るとともに、自分の保育を見つめ直す機会にもなりました。ワークシートの記入を通して考えが整理され、気づきもたくさんありました。
（小滝美行先生／３歳児担任）

### 園内研修ではこんな意見がでました

**STEP 1 子どもの気づき・育ち**

**子どもの発見・気づき**

◉ヤゴもおなかがすくし、生きるためには食べ物が必要なんだな。
◉ヤゴが何を食べるか、図鑑で調べれば分かるかもしれない。

**子どもの気持ち**

◉ヤゴが大きくなってトンボになるのを見たい。
◉ヤゴにオタマジャクシを食べさせてみたい。
◉僕が捕まえたオタマジャクシが食べられるのはいやだ。
◉オタマジャクシもかわいそう。ほかに食べるものはないのかな。

**STEP 2 学びの芽生えを促すための見通し（保育者の願い）**

◉自分の思いを友だちに伝えると共に、友だちの思いにも耳を傾けてほしい。
◉話し合いを通して命の大切さを深く考えてほしい。
◉ヤゴとオタマジャクシの両方の立場から考えてほしい。

**STEP 3 具体的な援助**

◉みんなが納得する結論が出るまで話し合いをサポートする。
◉子どもが納得したうえで、ヤゴを池に返してトンボになる様子を一緒に見守る。
◉ヤゴを池に逃がすとしたら、捕まえて図鑑で調べた子どもの気持ちを受け止めることも忘れない。
◉これからは季節を踏まえ、部屋にいろいろな図鑑を置いておく。

東京都 品川区立
第一日野すこやか園
園長 **丸山智子**先生

### 園での研修について

**幼保の保育者同士の相互理解が一番の収穫**

幼保一体施設である当園では幼稚園と保育所の保育者がお互いのよさを取り入れていくことを目指しています。しかし、今年度６月に開園したため、保育観や子どもへの接し方について深く話し合う時間があまりとれませんでした。今回の研修では、それぞれの保育者が「学びの芽生え」について理解すると共に、園全体として大切にしたいことをみんなで考え、共有することができました。共通理解の深まりによって、個々の保育者がこれまで以上に自信をもって子どもに接することができるようになると思います。今後もさまざまな保育の場面をテーマにして研修を続けたいと考えています。

**東京都 品川区立第一日野すこやか園（第一日野幼稚園・西五反田第二保育園）**

◎2010年に幼保一体施設となり、幼稚園と保育所が連携し、保育内容の融合を図っている。小学校へのスムーズな接続のため、同じ敷地にある品川区立第一日野小学校と協力して接続カリキュラムを構築している。

園長　丸山 智子先生（第一日野幼稚園）、大島 正美先生（西五反田第二保育園）
所在地　〒141-0031　東京都品川区西五反田6丁目5-6
園児数　60名（第一日野幼稚園・4～5歳児）、86名（西五反田第二保育園・0～5歳児））

データから見る
幼児教育

Data

保護者へのサポートに関するアドバイスつき

# 卒園前後の保護者の意識

ベネッセ次世代育成研究所が実施した調査「小1ママと子の放課後生活レポート」を紹介します。今回は調査結果に基づいて、東京学芸大学の岩立京子先生から保護者へのサポートに関するアドバイスをいただきました。卒園・入学を控えた保護者支援の参考としてぜひご活用ください。

### 今回ご紹介するデータの調査概要

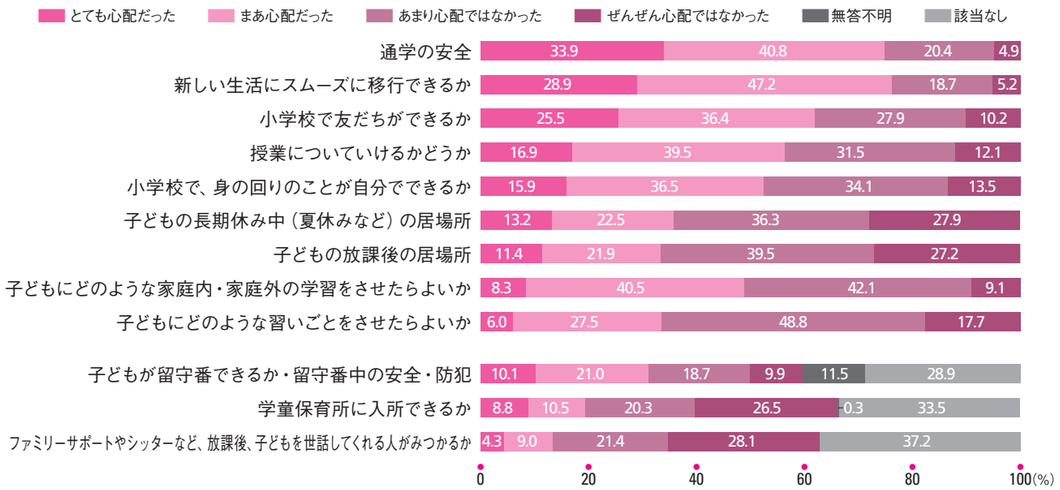
**調査テーマ**　小学校入学と放課後生活の実態、母子の生活変化
**調査対象**　小学校1年生の第一子を持つ母親　1,500人
**調査地域**　日本全国（平成19年度文部科学省「学校基本調査」の小学生の児童の人口分布を参考に、地域別の構成比を合わせている）
**調査時期**　2009年12月25日～27日
**調査方法**　インターネット調査
**調査項目**　小学校入学に向けての不安や準備、放課後の過ごし方の実態、学童保育所の利用実態、母親の就労変化、母と子の生活や悩みの変化、子育て支援へのニーズなど

**引用・掲載する際のお願い**　「ベネッセ次世代育成研究所『小1ママと子の放課後生活レポート』(2009)」と記載してください。
詳細の結果はベネッセ次世代育成研究所ホームページをご覧ください。→ http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/

## 入学前の心配事は「通学の安全」「新生活へのスムーズな移行」

**Q　お子さんが小学校に入学するにあたり、保護者としてどのようなことが心配でしたか。**

図1　【入学前】小学校入学に向けての心配ごと



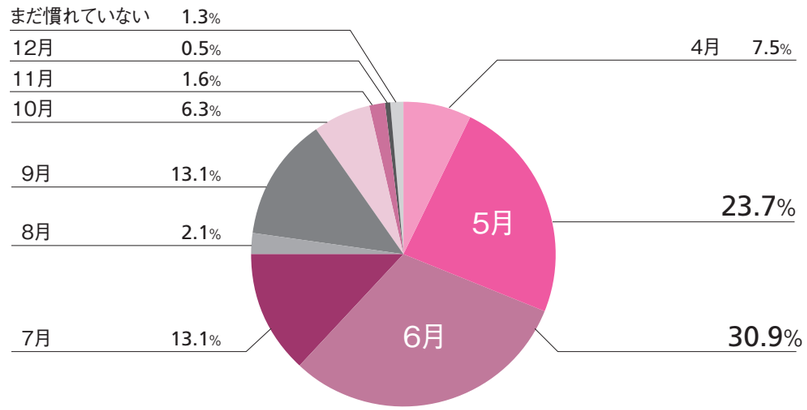

注1　学童保育所やファミリーサポート等の利用がない場合、子どもに留守番をさせない場合は「該当なし」を選択。

★「通学の安全」と「新しい生活にスムーズに移行できるか」を心配（とても心配＋まあ心配）する母親が7割以上を占めました。次いで、「小学校で友だちができるか」で、子どもが小学校生活を順調にスタートできるかどうかを心配している母親が多いことがわかります。

## 子どもが小学校生活に慣れてきたと感じるのは、5～6月が多い

**Q　お子さんが小学校生活に慣れてきたと感じられたのはいつごろですか。**

図2　【入学後】小学校生活に慣れる時期

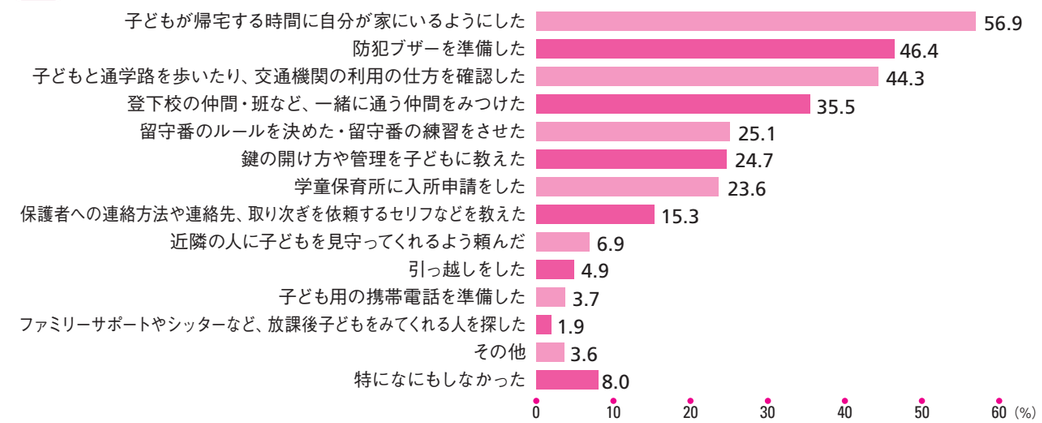



★子どもが小学校生活に慣れてきたと感じられたのは「6月」がもっとも多く、次いで、「5月」となりました。一般的に授業が通常のサイクルになり、給食も始まって、小学1年生としての生活スタイルが固まるころです。「4月」～「7月」までを合わせると、7割強の母親が、1学期の間に子どもが小学校生活に慣れてきたと感じています。

## 安全対策として、母親の6割弱が子どもの帰宅時に在宅している

**Q　お子さんの小学校入学にあたり、放課後の安全確保を目的として行ったことについて、あてはまるものをすべて選んでください。**

図3　【入学後】放課後の安全対策



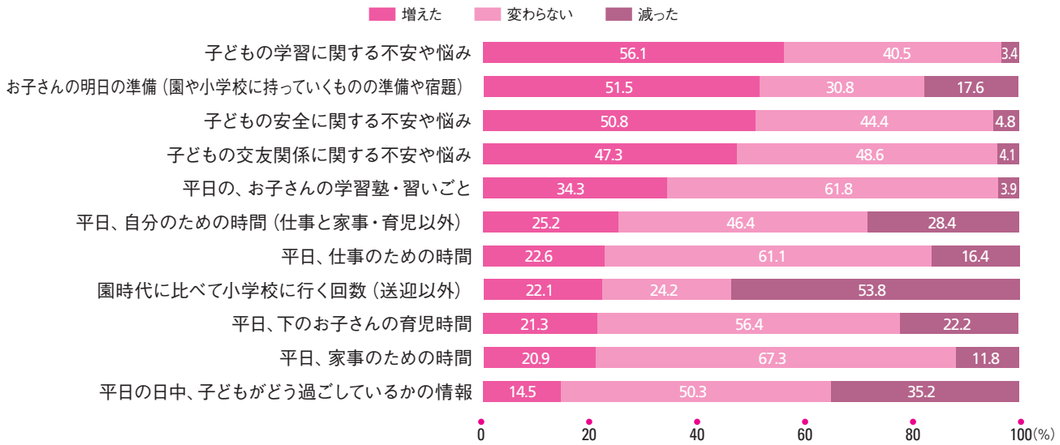

注1　複数回答

★最も多かったのは、「子どもが帰宅する時間に自分が家にいるようにした」で、全体の56.9%が選択しています。専業主婦だけでなく、働く母親も含まれていました。次いで、「防犯ブザーを準備した」が46.4%、「子どもと通学路を歩いたり、交通機関の利用の仕方を確認した」が44.3%で、登下校の通学路での安全対策が多いことがわかります。

## 入学後に増えたのは、明日の準備と安全に関する不安や悩み

**Q お子さんの小学校入学前と入学後で、あなたとお子さんの生活はどう変わりましたか。**

図4 【入学後】小学校入学前後の母と子の生活変化



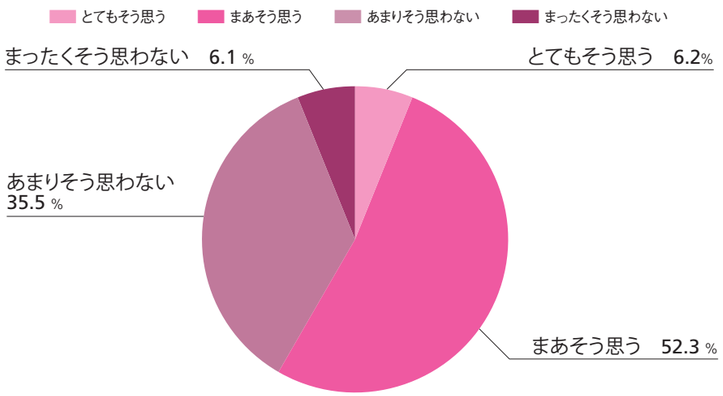

注1 各項目には「該当しない」という選択肢を準備した。「該当しない」回答は除いて集計。

★入学前後で、母親と子どもの生活や母親の悩みの変化をたずねています。最も増えたのは、小学生になることで新たに出現した悩みである「子どもの学習に関する不安や悩み」で、56.1%。「お子さんの明日の準備」が51.5%で続いています。また、園時代に比べると、小学校に行く回数が減った人が多く（53.8%）、保護者と先生との接点が少なくなっています。

## 入学を機に子育てから手を離そうと思う母親が約6割

**Q お子さんが小学1年生になったことで、「これまでよりも子育てから手を離してみよう」と思うようになりましたか。**

図5 【入学後】小学校1年生の母親の子育てに対する意向




★全体で6割弱の母親が、子どもが小学生になったことで、これまでよりも子育てから手を離してみようと思っています（「とてもそう思う」+「まあそう思う」）。その理由を複数回答で聞いたところ、「子どもが身の回りのことがだいぶできるようになったから」（76.9%）が最も多く、子ども自身の成長を実感していることがうかがえます。



Data

調査データを踏まえ、
卒園前の保護者のサポートを考える

# 幼児期の発達と一人ひとりの個性を知る園だからできるサポートがあります

今回の調査結果について、東京学芸大学の岩立京子先生に、卒園・入学を控えた子どもを持つ保護者を園としてどのようにサポートできるか、お話をうかがいました。

東京学芸大学 総合教育科学系教授
**岩立京子**
専門分野は発達心理学、幼児教育。編著書に『事例で学ぶ保育内容 領域 人間関係』（萌文書林）、『乳幼児心理学』（北大路書房）など。

### 卒園・入学という環境変化を保護者に理解してもらう

小学校入学にあたって保護者は「スムーズに子どもを小学校の生活に慣れさせたい」と願っているはずです。今回の調査データでも、保護者自身が「園と小学校の環境は大きく異なる」と考えており、不安を抱いていることがよくわかります（P18図1）。

大人であっても新しい職場などそれまでと違う環境に身を置くのは大変なストレスです。子どもも小学校入学で新しいルール、生活リズムにさらされ、戸惑い、混乱します。そのため、今までできていた身の回りのことができなくなったりすることも珍しくありません。それだけ子どもにとって小学校入学による変化は大変なことなのです。

ですから、園の先生が「小学校に入ってから今までできていたことが突然できなくなることもあるかもしれませんが、心配しなくていいですよ」と保護者に卒園前に伝えてあげられれば、保護者は安心して子どもを見守ることができるでしょう。

### 小学校生活に本当に慣れるまでには時間がかかる

入学して1か月くらいすると保護者の不安の内容も「新生活に慣れるか」から「学習についていけるか」に変わってきます。確かに、子どもは1か月くらいすると小学校の生活にも慣れ、一見落ち着いたように見えます（P19図2）。ただ、それはあくまでも生活パターンに慣れたという意味であり、先生やお友だちとの関係に慣れるにはもう少し時間が必要です。そのため、保護者が慣れたかなと思い始めたころに、子どもが急に甘えだしたり、様子が変わって見えることもあります。「本当に慣れるまでには半年くらいはかかるものだと長い目でみてあげてください」と園の先生から保護者に伝えるといいでしょう。

保護者は、「小学校に入学したのだから、少しずつ子どもから手を離そう」と考えているものです（P20図5）。もちろんそれは子どもの成長のためにも必要なことです。しかし、小学生になった途端、すべての子どもが自分の机で勉強できるというわけではなく、保護者の姿が見える場所でないと安心して勉強できない子どももたくさんいます。ゆっくりと手を離しつつ、子どもの育ちを見守ることが大切なのだと園の先生からぜひ保護者にアドバイスしてほしいと思います。

### 現場のみなさんへ

小学校に入ったからといって子どもは一気に変わるわけではありません。幼児期の子どもの発達と一人ひとりの子どもの個性を踏まえたアドバイスは、園の先生だからこそできるものです。さまざまな不安を抱える保護者に対して、「どんなことでも相談してください。一緒に考えていきましょう」と園の先生が声をかけることで、保護者の気持ちはきっと楽になるはずです。

ベネッセ次世代育成研究所
5周年記念シンポジウム開催報告

# 乳幼児の健やかな発達にとって大切な環境とは何か

ベネッセ次世代育成研究所は、2010年10月9日に、設立5周年を記念したシンポジウムを開催しました。当日は、約170名の方にご来場いただきました。今回は、その要旨をご紹介します。

**概要**

テーマ「乳幼児の健やかな発達にとって大切な環境とは何か」

**午前の部　日米の基調講演**　※午前の部の要旨は 24 ページに掲載しています。

- 「保育と子どもの発達」
  サラ・フリードマン（元アメリカ国立小児保健・人間発達研究所（NICHD））
- 「日本での妊娠期から子育て期にかけての家族の変容について」
  菅原ますみ（お茶の水女子大学大学院教授・発達心理学）

**午後の部　パネルディスカッション**

- 「乳幼児にとって望ましい子育て環境とは何か」

## パネルディスカッション
## ～乳幼児にとって望ましい子育て環境とは何か～

### 「父親の子育て参加」を切り口に望ましい子育て環境について議論

午前中に行われた菅原ますみ先生による基調講演では、欧米諸国と比べると、日本の男性の家事・育児参加の割合が低いことや、就労時間が長いという調査結果が報告されました。また、男性の家事・育児時間の割合が低いと出生率も低くなる傾向があることや、父親が子どもに関わる時間の長短は、父子の愛着形成や父親の子育ての肯定感に影響することも指摘。父親の就労や家事・育児参加が、望ましい子育て環境を考える上での重要なキーワードとなっていることがわかりました。

そこで、午後からのパネルディスカッションは、父親を切り口とした「望ましい子育て環境」をテーマとして設定。パネリストへの質問を会場の参加者からいただき、その質問に答える形で進められました。ここでは、その一部をご紹介します。

コーディネーター
**大日向雅美**
恵泉女学園大学
大学院教授
専門は発達心理学。

パネリスト
**武石恵美子**
法政大学教授
専門は人的資源管理、女性労働論。

パネリスト
**大豆生田啓友**
玉川大学准教授
専門は幼児教育学・保育学・子育て支援。

パネリスト
**横関恭孝**
東京都杉並区
高井戸児童館館長
子どもの遊び・活動支援、乳幼児の親子の支援に携わる。

コーディネーター・大日向先生より

**父親の子育てに対する意識は変わっていると感じますか？**

**A**　父親の意識は大きく変わっています。ただ、現実は、仕事とのバランスが難しいようです。

**横関館長**：私は、東京都杉並区にある児童館の館長をしていますが、最近の父親の子育てに対する意識はとても高くなってきていると感じます。学童クラブに子どもを迎えにくる父親は珍しくなくなりましたし、親子広場に赤ちゃんを連れてくる父親も少しずつ増えています。イクメンが話題になったり、家庭科が男女必修になるなどの PR 効果や教育的効果が大きいと思います。

**武石先生**：確かに調査でも、プライベートも大事にしたいという父親は増えています。しかし、仕事を優先している人が多いというのが現状です。日本の長時間労働の問題は、企業側の問題だけではなく、働く側の問題でもあるようです。「労働時間について問題意識はあるか」を聞いた国際比較調査でも、「問題意識がある」と答えた割合は日本がダントツで低く、もっと家族との時間を取りたいという意識が低いという結果になりました。

一方、出産前後の女性の就業状況を見てみると、非常に多くの女性が出産前後に会社をやめています。意識の面を見ても、「子どもが小さいときは働きたくない」という女性は少なくありません。「ワークライフバランスが必要」という声は、必ずしも高くないのが現実です。

参加者の質問

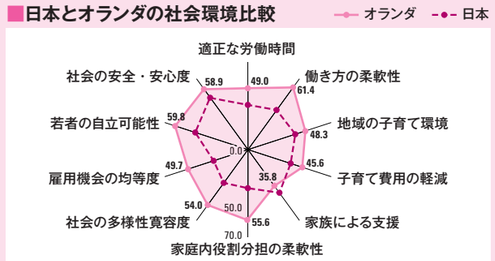
**父親が早く帰ると収入面で大変という面もあると思います。長時間労働はなぜ問題なのでしょうか？**

**A**　長時間労働＝悪ではありません。みんなが働き方を選択できる社会づくりが大切です。

**武石先生**：人には長時間働かなければならないとき、または、働きたいときもあると思います。大切なのは、個人が選択できる環境を整えること。それぞれの価値観やライフステージに応じて、さまざまな働き方を選べるオランダやスウェーデンでは、出生率も上がっています。

今、自分にとってなにが大事かという優先順位を考えながら、自立的な働き方を働く人自身が考えていけば、企業の施策も引き出せ、結果的に生産性も上がると思います。

■日本とオランダの社会環境比較




出典：内閣府「少子化と男女共同参画に関する社会環境の国際比較」報告書（2006年）

参加者の質問

**子育てに専念したい女性がいることの何が問題なのでしょう？　生物的な特徴を考えれば、母親が第一当事者であるのが自然のような気がします。**

**A**　いろいろな意識の人がいるのは当然。でも、昔の日本ではみんなで子育てをしていました。今後の日本を考えると、選択肢が広がったほうがよいと思います。

**大豆生田先生**：まずは、昔から育児＝母親がするという図式はあったのかということから考える必要があると思います。例えば、昭和の典型的家族と言えるサザエさん一家は、サザエさんだけが子どものタラちゃんと向き合っているわけではなく、周りの家族や地域の人々みんなでタラちゃんを見守っています。子どもにとって、特定の養育者から愛される経験は、もちろん必要です。しかし、家族や地域、みんなで育てることによって、子どもにとって大事なことが育まれることもある。母親だけを強調してしまうと危険だと思います。

**武石先生**：育児に関してはいろいろな意識の人がいて当然だと思います。しかし一方で長期的にみると、子育てに専念する女性が多い状況では今後、日本の経済や社会保障そのものが、立ち行かなくなる可能性があります。世の中の構造が変わっていくことを前提にして、母親の就労や子育てを考える必要もあると思います。

**参加者の質問**

**長時間労働が多い日本で、保育園が保護者のニーズに応えていくと、長時間保育や休日保育がどんどん増えていくと思います。この点についてどうお考えですか？**

**A** **保育の質とワークライフバランスを同時進行させて、子どもの育ちを保障できるようにすることが大切です。**

**大豆生田先生**：日本の長時間労働は、世界的にみても突出しています。このまま保育の規制緩和が進むと、低年齢からの11時間といったレベルの長時間保育児が増えると考えられます。これは、乳幼児期の子どもを育てる環境としてはあまりいい状態とはいえないのではないでしょうか。保育者にとっても、負担がさらに増えることになり、その中で高い質の保育を維持していくことは難しくなるでしょう。

ワークライフバランスが十分に進まない中で、保育の規制緩和が進むことへの危機感を持っています。

**参加者の質問**

**質の高い保育とはどのようなものだと思いますか？**

**A** **子どもの行動の背景にある心情を読み取って援助することではないでしょうか。**

**大豆生田先生**：一人ひとりの子どもたちが、自分らしくゆったりと過ごせること、そして、大人から大事にされ、いろいろな人やモノと関われる多様な環境を整えてあげることだと思います。

また、保育のプロであるということは、例えば、「かみつき」などの行動を子どもが起こしたとき、その子がなぜそうせざるをえなかったのか、その背景や意味を考えて対応できるということではないでしょうか。

**横関館長**：保育の質を考えたとき、家庭にさまざまな問題を抱え、親との愛着関係を形成できずに育ってきた子どもにどう対応するかも大切な点だと思います。そうした子どもたちを愛したり、大切にし、信頼関係を作ろうとすることも、保育者として留意したい点ですね。

**大日向先生**：今日、みなさんの意見をうかがいながら、子育ては今岐路に立っているのではないかと感じました。児童虐待の増加などの課題もありますが、分かれ道は、対策をきちんと講じれば良い方向に進むことができるということ。その兆しとして、父親の意識や行動が変わり始めているし、ワークライフバランスや子育ての施策も動き始めています。今、私たちがするべきことは、施設での保育か家庭保育か、親支援か子ども支援か、という二者択一ではなく、さまざまな要素を多面的に考えながら、辛抱強く問題に向き合っていくことだと思います。

## 基調講演 1　保育が子どもの発達に重要な役割を果たす

**サラ・フリードマン博士**

サラ・フリードマン博士は、アメリカの国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）で乳幼児の横断調査を実施。良質な保育が子どもの発達に重要な役割を果たすことが、科学的に実証されました。講演ではこれまでの保育研究の歴史を紹介。今後は、保育の有効性を高めるための研究が必要だと指摘されました。

## 基調講演 2　子どもの健やかな発達には父親、母親の QOL が大切

**菅原ますみ先生**

妊娠中から２歳までの子どもを持つ両親に対して行ったベネッセ次世代育成研究所の調査結果※1を紹介。父親と母親の QOL※2が子どもの健全な発達の土壌となるという結果を示されました。また、子育てスタート時には母親より父親の QOL が低いという結果から、父親へのサポートや労働時間の短縮の重要性にも言及されました。

※１ 第1回妊娠出産子育て基本調査　※２ QOL= クオリティ・オブ・ライフ。人々が感じている自分の生活や健康の良質さのこと。

**参加者の声**

サラ・フリードマン博士の講演を聞き、保育の質の向上に向けて努めていくことの大切さを痛感しました。

菅原先生の講演では、子どもの成長には親の状態が大きく反映するということがよくわかりました。

ワークライフバランスが進まず、規制緩和が進めば、保育の質を保つのは難しいという意見に同感です。

**シンポジウムの詳細は2011 年1月下旬よりウェブサイト上でご覧いただけます** ***http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/***



## ベネッセ次世代育成研究所からの発刊物のご案内

### これからの幼児教育を考える

2010 秋

**特集**

**特別なニーズをもつ子に寄り添う保育とは？**

◎「気になる子」やその保護者に対して園全体で取り組んでいくためには、どのような工夫が必要でしょうか。おふたりの専門家のかたと2つの園の実践事例から、そのヒントをご紹介します。

A4判 24ページ

2010 春

**特集**

**保護者の成長を促す園の支援とは**

◎園と保護者が互いに協力関係を築き、子どもの健やかな育ちを見守っていくために、園ではどのような働きかけを行うとよいのでしょうか。子安増生先生のインタビュー、公私立幼稚園・保育所の事例を紹介しています。

A4判 24ページ

2010 夏

**特集**

**家庭と連携した食育活動のあり方とは**

◎新しい保育所保育指針、幼稚園教育要領でも「食育」の重要性が挙げられています。大澤力先生のインタビューと園の実践事例などから、園と家庭が連携し、子どもが意欲的に食にかかわれる食育活動について考えています。

A4判 24ページ

2009 秋

**特集**

**保育者の資質を高める園内研修とは**

◎保育者が自らの保育を振り返り、気づきを得られるような「園内研修」とは？秋田喜代美先生のインタビュー、大豆生田先生のQ&A、園内研修の具体的な手法を実践事例とともに紹介しています。

A4判 24ページ

### 幼児教育・保育に関する発刊物

第1回
**幼児教育・保育についての基本調査報告書**
**（幼稚園編・保育所編）**

◎全国の幼稚園・保育所を対象に、幼児教育・保育の実情と課題を調査から明らかにしました。

B5判 160ページ

**幼児の遊びにみられる学びの芽**

◎4、5歳児の遊びの事例を59サンプル収集し、遊びに含まれる学びの可能性や保育者のかかわりを分析しました。

A4判 72ページ

**保育所での子どもの発達と保育のポイント**

◎0歳から就学前までの子どもの成長発達と保育者のかかわりや、幼児の言動の意味と援助のポイントをまとめました。

A4判 112ページ

**ベネッセ次世代育成研究所の刊行物はすべてホームページからご覧いただけます。**

各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください。 ▶▶▶ ベネッセ次世代育成研究所 検索

***http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/***

**編集後記**

幼小接続を取り上げた今号はいかがでしたか？私事ですが、4歳の息子の母親として印象に残ったのは「不安があるうちは決して学びには向かわない」ということ。先生や仲間、そして家族から「受け入れられている」という気持ちが子どもの成長に大きな影響を与えることをより多くの保護者の方にも知ってほしいと感じました。（橋村）


「これからの幼児教育を考える」2011春号
2011年1月20日発行

発行人　新井 健一
編集人　後藤 憲子
印刷・製本　(株)協同プレス
企画・製作　ベネッセ次世代育成研究所
発行所　(株)ベネッセコーポレーション
〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビルディング

編集協力　(有)ペンダコ／二宮良太
撮影協力　ヤマグチイッキ


©ベネッセ次世代育成研究所　◎無断転載を禁じます

**次号予告**

これからの幼児教育を考える 2011●Summer 夏

次号は**2011年5月下旬**発刊（予定）
年3回の発刊（予定）です